

「旧ソ連・東欧の映像と文学」第6講

7月5日(木) 5—6限(17:00~20:30)

イエジー・カヴァレロヴィチ監督

『尼僧ヨアンナ(Matka Joanna od Aniołów)』(1960)

1961年カンヌ国際映画祭 審査員特別賞, 1961年ワルシャワ人魚賞, ポーランド製作, 108分

解説: 関口時正

東京外国語大学名誉教授、ポーランド文学・文化論

ボレスワフ・プルス『人形』の翻訳で「第69回読売文学賞 研究・翻訳賞」、「第4回日本翻訳大賞」受賞

作品概要

監督: イエジー・カヴァレロヴィチ

脚本: タデウシュ・コンヴィツキ

イエジー・カヴァレロヴィチ

主演: ルツィーナ・ヴィンニツカ(ヨアンナ)

ミェチスワフ・ヴォイト(スーリン/ラビ)

原作: ヤロスワフ・イヴァシュキェヴィチ

(邦訳: 関口時正訳、岩波文庫)

あらすじ: 辺境の地。悪魔祓い師スーリン神父は、到着したばかりの宿屋で、馬丁、女将、中年男たちの悪魔憑きの噂を耳にする。悪魔に憑かれた尼僧たちは大声でわめき、みだらなことをしているという。彼は修道院へ向かい、尼僧マウゴジャータに迎えられたのち、8つの悪魔が取り憑いているという尼僧長ヨアンナに出会う…。



後期教養科目および文学部専修授業「旧ソ連・東欧の映像と文学」ですが、履修者以外の聴講も歓迎します。(事前登録不要、入場無料)

原作者 ヤロスワフ・イヴァシュキェヴィチ

1894年ウクライナの村カルニクのポーランド人家庭に生まれる。第一次大戦後、ワルシャワに移住し、公職を務める一方、諸芸術の評論にも取り組んだ。ポーランド現代文学の中では珍しく、愛国憂国亡国の問題、祖国の蜂起や戦争といった、政治的主題からは距離を置き、愛や死、歴史の無常、あるいは美の衝撃に直面した個人の内面劇に焦点をおいた作品を執筆した。1980年ワルシャワ没。代表作に、「白樺森」「ウトラタの水車小屋」「菖蒲」など。

場所

東大本郷キャンパス

(国際学術総合研究棟)

「文学部 三番大教室」

(赤門入って右手建物の奥)

Venue: Auditorium No.3 [Sandai]

Faculty of Letters,

the University of Tokyo

赤門そば「三番大教室」



問い合わせ

スラヴ文学研究室 楯岡求美 (kumit@l.u-tokyo.ac.jp)